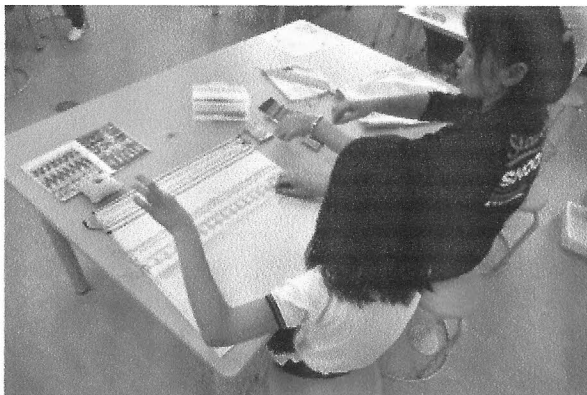


障害ある子の就学、悩む親 「長所大事にしてくれるか」

有料会員記事

玉置太郎、渡辺元史 2020年8月23日 21時30分



大阪府立枚方支援学校の就労支援の授業では、生徒らが刺繍(ししゅう)を学ぶ=大阪府枚方市、渡辺元史撮影



障害のある子どもの就学先をどうするか、悩んだ保護者は少なくない。専門的な支援を求め、特別支援学校を選ぶ家庭が増え、学校の新設が相次ぐが、教育現場では障害の有無にかかわらずともに学べるよう、通常校の特別支援学級を充実させる取り組みも続く。(玉置太郎、渡辺元史)

京都府に住む母親(34)は毎朝、近所のバス停にダウン症の長男(9)を送る。通学バスで10分ほど、特別支援学校の小学部に通う。昨年、バスに乗りたがらない時期があった。担任は、翌日の予定と「学校で待ってます」と書いた手紙を長男に持たせてくれた。

クラスは児童3人に担任1人。授業中のトイレ補助のための教師もいる。朝の個別学習では、各児童にあわせた課題に取り組む。指先を使うのが苦手な長男には、衣服のボタンかけや、洗濯ばさみをつまむ作業の訓練を用意してくれた。

長男は生後3カ月で、ダウン症の診断を受けた。同時に心臓疾患が見つかり、4カ月間入院して、生死のかかった手術を受けた。知的な発達も他の子よりゆっくりだ。

障害児が通う療育施設を卒園したが、母親には地元の小学校に通わせたい思いがあった。「普通の子と一緒にいることで刺激があるだろうし、近所に友達ができることも大きい」

入学前年の秋、最寄りの公立小へ、特別支援学級の見学に行った。けれど、障害がある子の自立を最優先に考えているように感じられ、「この子の優しい気持ちとか、発達検査の結果には出ないような長所を大事にもらえるだろうか」と不安が残った。

後日訪れた支援学校の教師からは、子どものペースにあわせる姿勢を感じた。懇談の間に他の教師と遊んだ長男が「楽しかった」と笑っていたことも決め手になった。「親として、これをできるようになっ

てほしい、という思いは置いておこう。この子が笑顔でいられる場所が一番」。そう決心し、支援学校を選んだ。

特別支援学級の子、過去10年で倍増

国は障害がある子とない子がともに学ぶインクルーシブ教育を進めている。通常校にある特別支援学級に在籍する子も増えており、昨年度は全国に計約28万人。過去10年で倍増した。

支援学級の数が全国最多(昨年度約7千学級)の大阪府。うち約2千学級に9千人が在籍する大阪市の教育委員会は、2016年にインクルーシブ教育推進室を設け、支援者計約600人を各校に配置するなど、態勢を整えてきた。

ある市立小は、児童約340人のうち約50人が特別支援学級に在籍。主に国語と算数の授業で、ふだん学ぶクラスから支援学級に移る。障害別に8学級あり、担任が1人ずつ付く。

支援学級での授業の合間には、みんなで体を動かし、知覚や注意力といった認知機能のトレーニングも採り入れた。保護者とは毎日、連絡帳を交わし、学校や家での様子を細かく報告し合う。学期ごとの教員研修では、支援学級の子どもの成長を全員で共有し、「全教職員で支える気持ちが高まってきた」と担当教諭は言う。

ふだんのクラスでの授業では、支援学級の児童も他の子らと議論し合い、自分の意見を発表する。校長(62)は「一緒にいるのが当たり前という環境で、共生の気持ちが自然と育まれている」と話す。

大阪市教委によると、市立学校の支援学級に在籍する子どもは10年間で倍増した。担当者は「子どもの増加とともに支援のニーズも多様化しており、対応するための人材や予算、専門性を確保していく必要がある」と話す。

インクルーシブ教育を進める上での課題について、「通常校の教員の間で、支援教育に関わる専門性がまだ十分に高まっていない」(宮城県教委)、「通常校の現場で障害への理解はまだ十分とは言えず、研修を通した専門性の向上に努めている」(栃木県教委)などの声があった。